

「復興ワードマップ研究会」(第8回) 2019年3月15日

出席者：近藤誠司・宮本匠・石原凌河・李勇昕・宮前良平

〈山中茂樹先生の人間復興論をもとにフリーディスカッション〉

・昨年の冬に発刊された「復興」というワーディングの系譜学では、時代を「日本書紀」のころまでさかのぼって、「復興」ということばの内実と変遷を考察していらっしゃる。
・ここからわれわれが学ぶべきは、(1) 方法論としての系譜学、(2) 「復興」というコンセプトの時代変動、(3) 集団主義と個人主義という観点の妥当性、(4) そしてもうひとつは、「復興」というコンセプトを外延して「防災」というコンセプトの時代変動をみることができるのかという点。

・(1) 方法論に関しては、この研究会でも、さらに議論を進める必要がある。山中先生が丹念におこなっている「政治家(為政者)」の発言をおさえておくこと、このアプローチは参考になる。貴重なエビデンスは、議論に耐えうる材料になる。

・(3) をどうみるか。論者によって、また時代によって変わるだろう。

・「人間復興」を置き去りにしてきたという見立ては、たとえば、科学主義・合理主義・近代主義、もしくは官僚主義の観点からも、論じることができる。

・「集合的否認」というドライブによって説明できることも多い。多種多様な(復興上の)課題を「いろいろしんどいから、なにも見なかったことにする」という集合的否認。人を見るのではなく、グラフやレポートを見る。法律や基準を見る。リアルな災害を見ない、被害を見ようとしなないという心性。社会がシュリンクして、「こっちも(別のカテゴリーも)たいへんだよね」と両論併記にしておき、とどのつまりは、お茶をにごす構え。知ってはいるけど、やってはいない。言い訳を先に準備する世間。

・「集合的否認」は、政治家、行政職員だけの問題ではなくて、市民のなかにも底層で広がっている。ちょっとでもよいから改善していこうとポジティブに構えるのではなくて、ゼロサムになっている。「しんどいから、ゼロ、やらない」。助成の基準を少しでも満たしていなければ、もはやそれは(現にそこに被害があるのに)被害とはみなさない。無かったことにしてしまう。

・ただしもちろん、これまでさんざんハードル(社会の要求水準)をあげてきた結果、もう(社会が/行政が/管理者側が)受け止め切れなくなってきて、世間全体が無意識的にバランスしはじめている点もあるのではないか。

・「インクルーシブ」と言い募っている日本社会の文脈は、みんなの問題として「抽出する」「析出する」ということをやっているだけでなく、責任を「拡散」「希釈」させてがっているともいえる。

・台湾では、住居が残っていても、仮設住宅に入れるケースがあった。日本の場合は、基準の厳格化が、現場のアドリブを許さない。公平性の原理にがんじがらめになっている場面がある。臨機応変ということだが、単なるお題目になっている。

・「大目に見る」というユニークな日本語。しかし現在の日本では、人を見ないで手元のルールブックばかり見ている。もしくは、ルールばかり作っている。

・だれも利用しない／利用したげらない／利用しづらい「ブロック塀」の助成制度。とりあえず予算化はした、議会で突っ込まれない程度の制度は走らせた、でも、町中の危険箇所は減っていない。またすぐに忘れ去られていく。これはこれで仕方ないという社会の割り切り。そういうもんだという大人のあきらめ。

・風化を懸念しあい溜飲をさげるメディアの作法、常套手段。

・「地区防災計画」の精密化が、地域住民をしぼる可能性。計画をどんどん緻密にすると、ルールを作っている側には最初は満足感がある。しかし、仕組みはハイブローに過ぎて、だれも実行できない。そもそもみんなに周知できていない。仮にみんなに周知してしまうと、計画策定者は実際に問題が発生したとたん、「責任」を問われる可能性がある。なぜこんな計画を作ったのか！

・まさに、可視化された「ババ抜き」ゲーム。だれもが薄々、このババ抜きには参加しないほうがよい（得しない）ことを知ってしまっている。そこにババがあることだけが共有されていて、その抜き取り方を誰も知らないし、誰も加担しようとしな（集合的否認、シニカルな否認）

・神戸には、阪神・淡路大震災の知恵として、「（被災地において）だれが責任とるんや、という議論の果てに、責任とった人はいない、だから、だいじょうぶや」というものがある。責任論を責任論という地平で議論すべきか。それとも、責任論を超える議論として展開すべきか。責任と言わない責任。

・「属人的」ということばを、日本社会ではネガティブに使用することばかりだが、実際には、さまざまな営みに対して本当は属人的におこなうことを求めあっている（きめ細かい対応、個別避難、個別計画、...）。Look at me, not everyone!

・情報化のドライブが加わって、属人的なかわりには不公平感を高めてしまう。Aという避難所では、炊き出しが美味しい、Bという避難所では炊き出しがまずい。消費者の心性でサービスを評価し合い、公平性を吟味し合い、責任を追及し合う。

・「復興」ということばの由来。漢籍では、どのように扱われているのか？ 「史記」にはどの程度出てくるのか？ それにしても、漢語を分析対象として、そこに「為政者」の理念が込められていると判じるのは、早計ではないか。漢語は、古来、社会上層者たちしか扱えないことばであった。

・同様・類似の系譜をたどることば群と、そうでないことば群を比較分析しないかぎり、この論点を評価することは難しい。この研究会ではこの論点に拘泥することは回避して、議論を先に進めよう。ここから2点、バトンをつなぎたい。1つは、新潟中越地震の際には「復興」ということばは、ポジティブなイメージがあったということ。もう1つは、「防災」ということばの系譜学は、どのように成り立つのか。

・神戸のひとたちは、「復興」ということばに、きわめてネガティブなニュアンスをもっている。中越のひとたちには、あのころさほど抵抗がなかった。敢えていえば、行政というものに対して、ネガティブなニュアンスを前提にはしていなかった。中越のひとたちから言わせれば、「復興」という理念を、現実の状況にうまくあてはめ、利用したかった。評価するならば、**ポリティカル**に上手にふるまおうとした。

・神戸では、「行政VS住民」という構図を持ち込みたがる。官製の「まちづくり協議会」は、官製だからダメなのか？ 「官」の気配をそこまで消さないダメなのか？ 現状、ときに「民」のほうが「官」のように**マネジメント**したがつている閉塞について、どのように向き合えばよいのか？

・ただただ「復興」ということばを議論することの浅はかさ。「復興」をめぐる「何」を議論すべきか（復興をめぐる～）を、あらためて見出さないといけない。

・「防災」ということばは、たかだか百余年の歴史しかないという。しかし、本当にそうなのか。「備える」ということばのコンセプトは、昔からあった。別のことばが具体的にその営みを指し示していたのではないか。

・台湾における「防災」ということばは、多分に日本の影響を受けている。防災訓練という営みも、日本の物まね／後追いをしているふしがある。

・鴨長明「方丈記」における住まい方の哲学。「事前減災」の実例でもあり、「レジリエント」な暮らしぶりを提案している。現在の「防災」のコンセプトの貧困を、古来の「暮らしぶり」から、もっと補うことができるのではないか。

・いまさえよければそれでよいという「**コンサマトリー**」な感覚。「**インストルメンタル**」な感覚を超克しようとして「**コンサマトリー**」な感覚を呼び出しても、未来の先行きが見えないと容易に「**刹那主義**」の罠に陥ってしまう（もしくは、未来が「手に負えないものとして」見えているからこそ、いまの現状に妥協し引きこもってしまう）。集合的な**インストルメンタル**が弱まると個人的な**コンサマトリー**に逃避してしまう。

- この個人主義の負のスパイラルを乗り越えないと、社会の変革は成し遂げられない。
- 「国家百年の計」を、それは為政者の勝手な願望であって「人間復興ではなかった」と断罪できるのは、いつの時代の、だれのポジションからなのか。集合主義的に、未来を見はるかす展望を持つこと自体が罪深き行為であるとするならば、そもそも現在の閉塞を超克することに手を貸すことなどできないのではないか。

- 都市計画分野における「タクティカル」というブーム。もしくは「エリアマネージメント」という流行り。個別に、きめ細かく、「こつこつ」地道にこなすというのが最近の潮流だといえる。「為政者が、ばーんとやる」ということを理想的に語る文脈は、ほとんど無くなっている。長期的な未来が描けない（そのことをみんなが知っている）ので、だれも長期的な展望をもつてのぞまない。未来を描こうとすれば、シニカルに馬鹿にする世間の空気。

- 「集合・マス」と「こつこつ」を、どのようにかけあわせていけばよいのか。
- 山中先生の論考も、結局は、出口をそこに置いているように読める。
- あとは、どう実践するか。
- 具体的な「希望」を掬いだすこと。

(了)